

# エコツアーガイドの現状とその課題

——北海道・知床を事例に——

平井純子

## I はじめに

エコツーリズムは、1970年代に発展途上国の環境保全と観光振興の両立を目指して生まれた概念である。日本では1990年頃から、民間業者による原生の自然が残る地域での取り組みに始まり、90年代後半には日本エコツーリズム推進協議会（現日本エコツーリズム協会）などの民間推進団体が設立され、エコツーリズムの普及が進んできた。このような動きを受けて、2004（平成15）年より環境省にエコツーリズム推進会議が設置され、国レベルでのエコツーリズムの推進が開始した。また、2007（平成19）年6月には「エコツーリズム推進法」が成立し、08（同20）年4月より施行されるに至った。近年では地域の自然環境を配慮しつつ、地域の創意工夫を活かしたエコツーリズムの推進が推奨され、地域活性化の起爆剤としても注目されている。エコツーリズムの定義について、環境省は「自然環境や歴史文化を体験しながら学ぶとともに、その保全にも責任をもつ観光のあり方」としている。このエコツーリズムの概念にもとづいて行われるのがエコツアーであるが、これには、エコツアーガイドと呼ばれる存在が重要な役割を果たすことになる（広瀬 2006、敷田ほか2008）。エコツーリズムに期待されている持続的な自然観光資源管理の実現に、直接的に関わるキーパーソンとなるエコツアーガイドであるが、その果たすべき役割は明確化されていないわけではない（海津 2008）。エコツアーガイドに求められる役割と能力を文献により考察した武（2011）によると、エコツアーガイドには顧客サービス、環境教育、資源管理、地域貢献の役割が期待され、特に自然観光資源管理においては実質的な担い手としての役割と能力をもつことが期待されるという。これまでエコツアーガイドに注目した研究には、屋久島を対象とした枚田（2001）、田島（2003）、松本ほか（2004）や、神奈川県西丹沢地域を事例とした米津ほか（2010）、西九十九島の武ほか（2010）等があるが、事例は多くはなく、地域的偏りがあるため、現場サイドにたった研究蓄積が急務である。

本研究では、日本においてエコツーリズムの概念にもとづいたエコツアーが早い時期より行われている知床地域を事例に、エコツアーガイドの現状について調査を行い、そ

の問題点について考察する。現在、日本のエコツアーガイドは専門ではないボランティアガイドが多くみられるが、知床では専門の割合が大きいこと、自然に恵まれているがゆえの危険をはらんでいるため、安全管理に対する高い意識が不可欠であることから、エコツアーガイドの現状を把握する地域として適すると考えられるため、知床を調査対象地とした。

調査方法として、冬季においてエコツアーを実施する5団体を抽出し、半日のスノーシューによるウォーキングツアーに同行し、参与観察を行った。エコツアーガイドのガイドの内容について検討し、その現状とその問題点について考察した。

## II 知床の概要

知床半島は北海道北東部に位置し、長さ約70km、基部25km、中央部の幅15kmの細長い半島ある。このうち2005（平成17）年世界自然遺産に登録されたのは、陸地部分は遠音別岳から知床岬まで、海域は斜里側の幌別川から羅臼側のルサ川までの範囲であり、知床の特徴は海域をも登録範囲に含んでいることにある（図1）。知床は北半球で最も低い緯度で海氷がみられる海域となっており、陸と海の生態系の相互関係が豊かな生態系をつくりだしているため、多くの生物にとって特に重要である。そのため、希少な動植物、シマフクロウ<sup>1)</sup> やオオワシ<sup>2)</sup> などの絶滅の可能性のある鳥類、サケ科魚類、トドや鯨類などの多くの海生哺乳類にとって、世界的にみても貴重な生息域となっている。

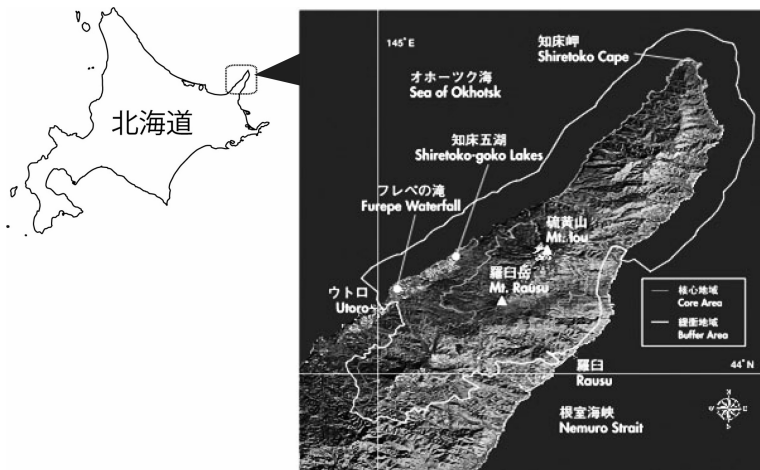


図1 知床の概要（環境省ホームページの図に加筆）

<http://www.env.go.jp/nature/isan/worldheritage/japanese/shiretoko/data.html>

このような自然に恵まれた知床では、地域内、特に国立公園内での望ましい保護と利用のあり方について話し合いをもつ場「知床国立公園適正利用基本構想検討会」<sup>3)</sup> が、

2001（平成13）年より設置され、「適正利用基本計画」を定める提案がなされた。02（平成14）年には「知床国立公園適正利用基本計画検討会」<sup>4)</sup>が設置され、04（平成16）年に、まず知床国立公園の先端部を対象とした「知床半島先端部地区基本計画」に策定された。続いて、知床半島の先端部以外の地域を対象とした「知床半島中央部地区利用適正化基本計画」について、05（平成17）年、環境省自然環境局東北海道地区自然保護事務所長<sup>5)</sup>がこれを定めた。また、知床は04（平成16）年度からの3か年にわたり、環境省によるエコツーリズム推進モデル地区に選定され、滞在型観光の推進、漁業など地域の産業を取り入れたプログラムの開発・試行、エコツーリズムを担うエコツアーガイドが守るべき共通のルールの検討などを行ってきたことを踏まえ、07（平成19）年、知床エコツーリズム推進協議会により「知床エコツーリズム推進実施計画」が策定されている。同年の「知床エコツーリズムガイドライン」には、知床におけるエコツアー実施の際に守るべき自主ルールを定めている。

知床におけるエコツアー実施の際、安全確保の観点から回避すべきは、夏季においてはヒグマなどの野生生物との接触、冬季の遭難等が考えられる。前者について、ヒグマは日本に生息する陸生哺乳類で最大で、大きいものでは体重400kgにもなる。知床はヒグマの高密度生息域であり、年間のヒグマの出没情報件数はこの10年あまり、600～900件<sup>6)</sup>となっている。基本的には人間に積極的に近づくものではないが、子連れや餌を守ろうとするヒグマは特に危険であり、知床での死亡事故はないものの、毎年ニアミスが発生している<sup>7)</sup>。後者については、一面の雪景色の中で吹雪や日没により方向を見失うことがあり、また間違った足跡をたどるなどして、道路や建物から近い場所であっても遭難することがある。海岸沿いは高さ100mほどの断崖が続いており、積雪と風により吹き溜まりがあると、断崖の存在に気づかない場合もある。これら日常では想定しえない危険があるが、観光客にはその重大さが伝わらないことが多く、例えばヒグマを見かけた人が携帯電話のカメラ撮影機能を使ってヒグマに近づいていった、冬季に軽装で日没直前に原生林へと向かった、などの事例もある。知床でのエコツアーにおいては危機管理意識の醸成と安全管理の重要性が指摘できる。

知床のエコツアーガイドは、50名ほどだといわれる<sup>8)</sup>。2004（平成16）年に設立された知床ガイド協議会に所属するガイド団体は、大小あるものの19となっており、各事業所の代表的なガイド対象地として、知床五湖やフレペの滝、羅臼湖、流氷ウォーク、山岳をあげている。斜里町の観光客入込数（図2）をみると、世界自然遺産登録の2005（平成17）年に、観光客数が増加したものの、翌年からは漸減傾向にあり、翌々年からは遺産登録以前の数を割り込んでいる。観光客が集中する7～9月の年間入込数が全体の半数

以上を占めており、冬季との差は大きい。冬季の観光客確保のために、地元有志や知床斜里町観光協会によるオーロラファンタジー<sup>9)</sup>を行い、新たな体験型プログラムを開発するなど努力をしており、一定の効果を挙げてはいるものの、依然厳しい状況にある。現在、冬季の知床において最も人気が高いプログラムはドライスーツを着用し流氷の上を歩いたり、流氷の海に浮かんだりするアクティビティである。今回の調査では、エコツアーガイドの現状を把握するため、インタープリテーションのより充実したウォーキングツアーが適切であることから、半日のツアーに同行した。

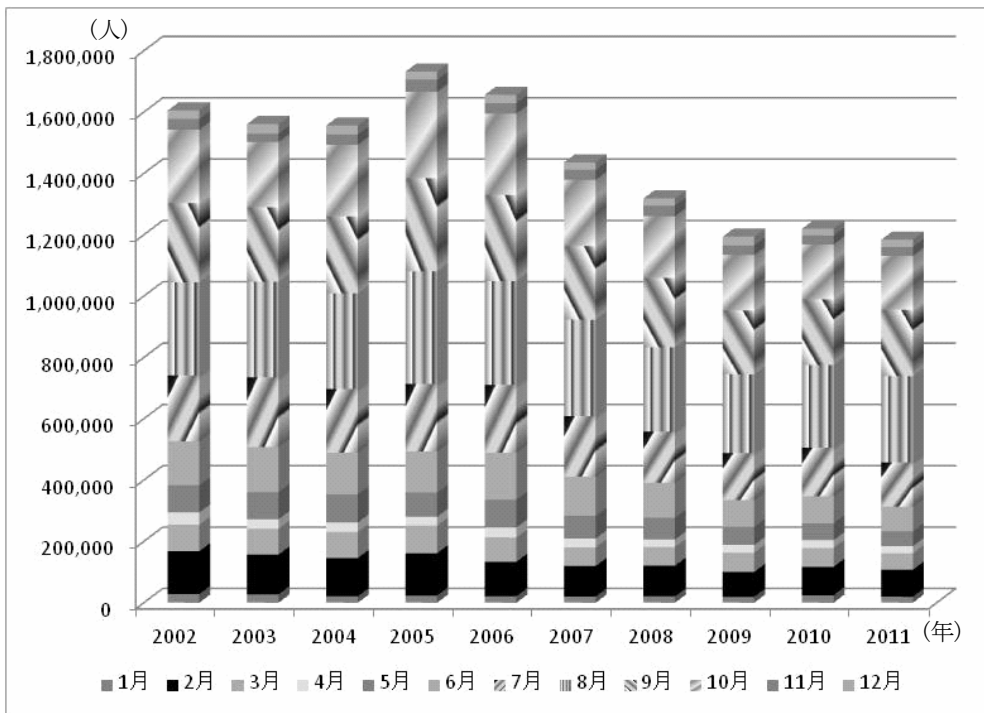


図2 斜里町月別観光客入込数

(斜里町 平成14～23年度 観光客入込内訳表より筆者作成)

### Ⅲ エコツアーの現状～冬季の半日ガイドツアー参加観察を通じて～

参加観察は、斜里町に拠点をもつ主要なガイド会社を中心に、冬季の半日ガイドツアーを取り扱う5社について(表1)行った。各社の概要は次の通りである。

A社は1998年に設立されたNPO法人であり、知床における民間業者によるエコツアーガイドとしては早い段階から活動している団体である。夏季は知床五湖ガイドウォークやフレペの滝ガイドウォーク、知床ナイトシアターなどのネイチャーガイドのほか、先住民であるアイヌの文化や自然観、歴史等を紹介するエコツアー、冬季は流氷ウォ

表1 参与観察を行った5社の概要（2011年2月現在）

	A社	B社	C社	D社	E社
設立	1998年	1999年	2006年	2006年	2009年
従業員数(専業数)	8名(4名)	2名(2名)	7名(7名)	6名(2名)	1名(1名)
代表の出身地	東京都	千葉県	北海道	東京都	福島県

ークやスノーシューウォーク、野生生物観察ツアーなどのプログラムを提供している。ガイド業のほかにはまちづくりやマーケティング、コンサルティング業にも携わり、WEBラジオを開局、また株式会社形式のカフェをオープンさせるなど、幅広く活動を行っている。

B社は1999年に開業した個人のみを対象としたガイド会社である。夏季は知床一日ツアーや知床五湖自然観察ツアー、早朝フレペの滝散策ツアーなど、冬季は冬の知床一日ツアーのほか、早朝オジロワシ・オオワシ観察会、スキーハイキング、スノーシューツアーなどのプログラムを提供している<sup>10)</sup>。またガイド業の傍ら、地形上ゴミの溜まりやすい知床半島の美化活動に携わったり、年間売り上げの一部を斜里町が進める「100平方メートル運動・トラスト」へ寄付したりと、知床の自然を守る活動に尽力している。

C社は知床でエコツアーを手掛けた財団法人から分離独立した株式会社である。夏季の知床自然体験一日コースや羅臼湖トレッキング、知床五湖一周ツアー、夜の動物ウォッチングなど、冬季は冬の自然体験一日コース、冬の知床五湖スキーツアー、原生林スノーシュートレッキング、冬の動物ウォッチングなどのプログラムを提供している。地元出身の社長のもと、財団法人時代に行っていた調査研究のノウハウを活かし、ライトセンサス調査やエゾシカ行動調査などの受託調査事業や、地元の公立学校への出前授業や大学ゼミ研修の受け入れなどの教育活動にも力を入れている。

D社<sup>11)</sup>は1948(昭和23)年設立の地元バス会社が設置したガイド部門である。夏季はネイチャーガイドバス、知床五湖ガイドウォーク、原生林と湯の華の滝ガイドウォーク、羅臼湖ガイドウォークなど、冬季は知床スノーハイキングといったプログラムを提供している。北海道運輸局長より『環境保全優良事業者』として表彰されるなど、環境保全活動に尽力している。

E社<sup>12)</sup>は、英語講師であり、森林インストラクターの資格をもつ、通訳案内士でもあるエコツアーガイドである。ゲストの要望に応じたツアーを提供している。知床唯一の英語の通訳案内士であり、外国語対応が十分とはいえない知床においては貴重な存在である。

以上5社に対する参与観察を、2011年2月10日から12日に行った。現状把握のためのポイントとして、知床ルール「中央部地区利用の心得」及び「知床エコツーリズムガイ

ドライン」に記される「守るべきルール」を基準とした（以下ルール）。ただし、エコツアーガイド実施時でなく事前に取り組むべきもの、夏季のヒグマやハチ出没時、漁業活動期を想定したものは、今回の調査では除外した（表2）。できるだけ統一したコンセプトでのガイドを体験するため、「原生林をスノーシューでトレッキングする半日のプログラム」でオーダーしたが、A社のみ調整がつかず「フレペの滝スノーシューウォーク」というプログラムへの参加となった。

当日のガイドの詳細について、各社のガイドルートについては図3～7、ルールの遵守状況を表3、ガイドの内容を表4に示した。A, B, C, D社は、まずウトロの各事務所に集合し、ツアー代金の支払い、防寒着のレンタル等をしたのち、マイクロバスでウォーキングのスタート地点に向かった。E社はウトロに位置する道の駅に集合し、ウォーキング地点に移動した。

エコツアーガイドの現状とその課題  
～北海道・知床を事例に～

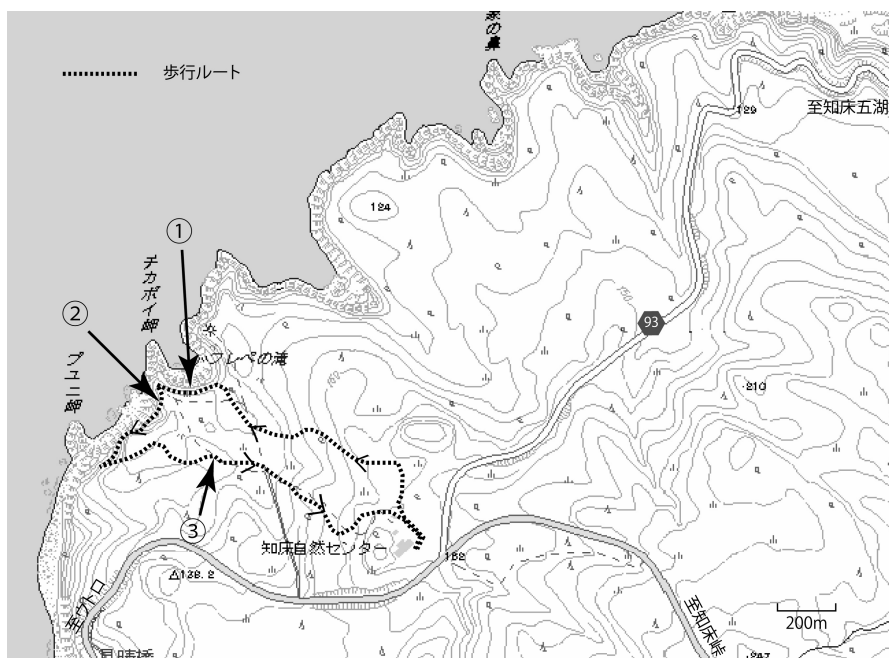


図3 a氏のガイドルート

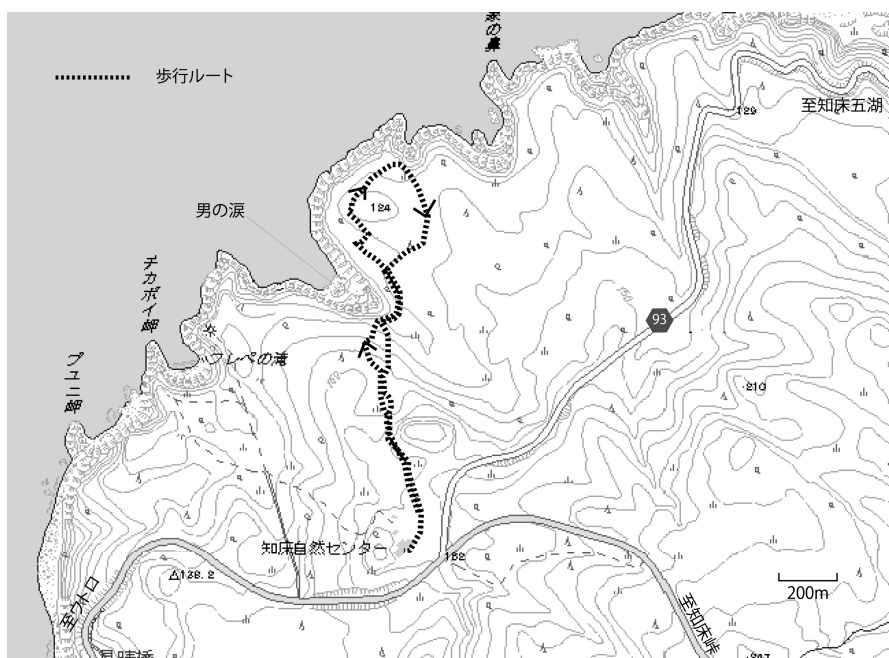


図4 b氏のガイドルート

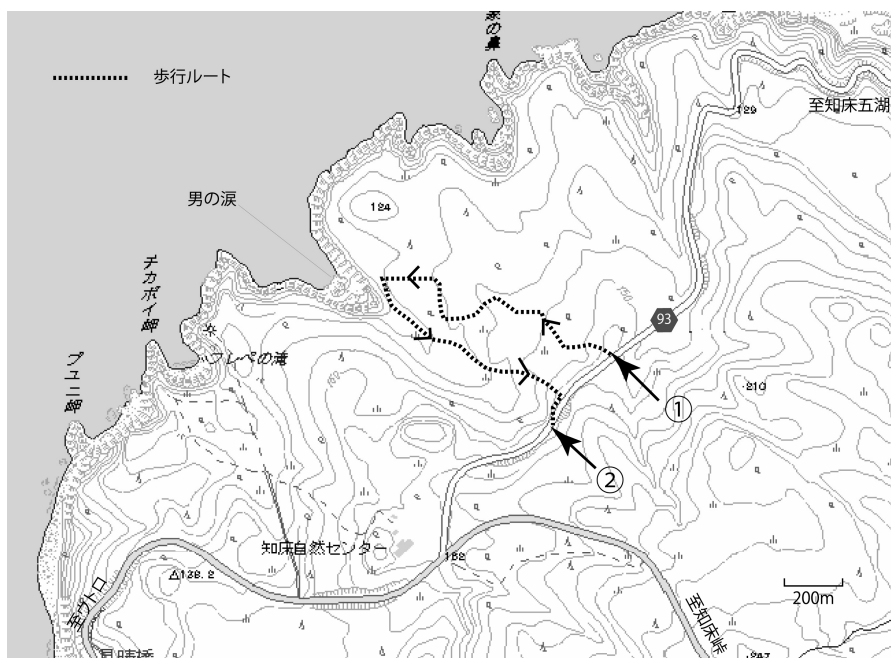


図5 c氏のガイドルート

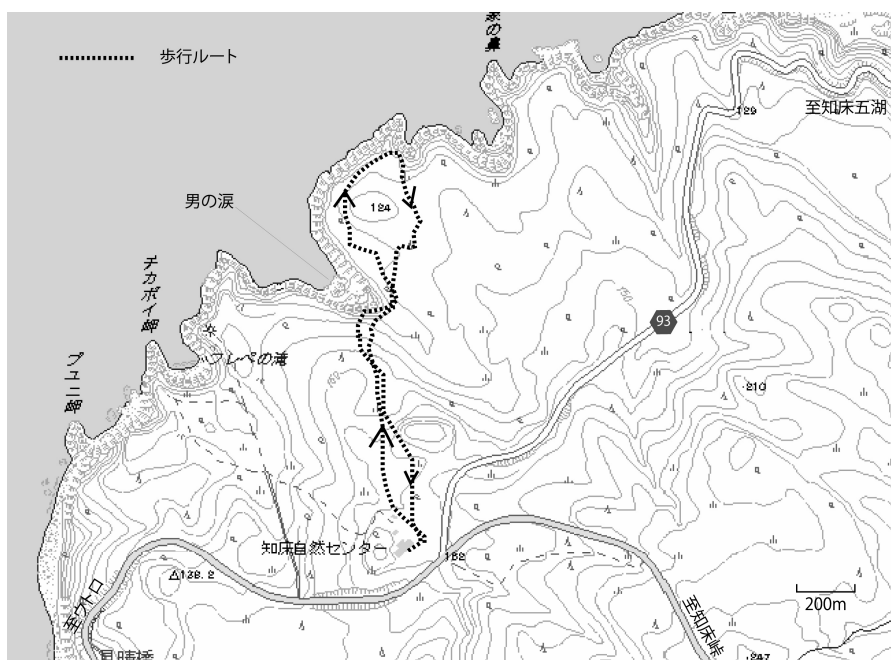


図6 d氏のガイドルート



エコツアーガイドの現状とその課題  
～北海道・知床を事例に～

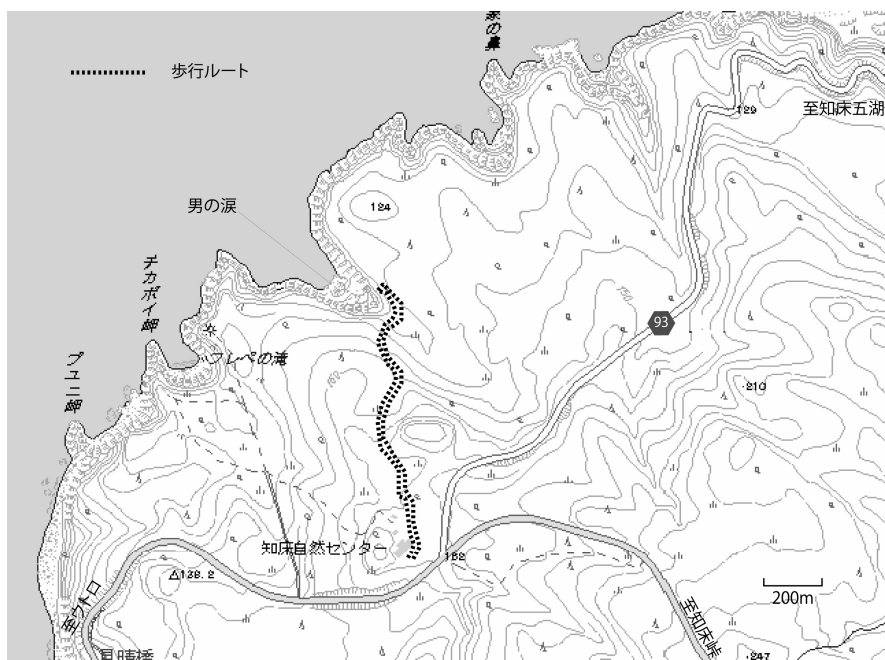


図7 e氏のガイドルート

表2 参与観察時のチェックポイント  
 (知床ルール「中心部地区利用の心得」及び「知床エコツーリズムガイドライン」  
 から筆者作成  
 ( [http://dc.shiretoko-whc.com/data/management/rules/chuou\\_rules\\_2008.pdf](http://dc.shiretoko-whc.com/data/management/rules/chuou_rules_2008.pdf)  
 (<http://dc.shiretoko-whc.com/data/management/rules/guideline.pdf> 参照))

心得・ガイドライン	項目	本研究でのチェックポイント	備考	
知床ルール 「中央部地区利用の心得」	3つの柱	1. 自然環境への配慮	○	
		2. ヒグマに対する注意	○	
		3. 地域の生活・文化への配慮	○	
	10の約束	1. 野生動物に食べ物を与えない	○	
		2. 道を外れて歩かない	○	
		3. 動植物をとらない、脅かさない、傷つけない、持ち込まない	○	
		4. コミは持ち帰る	○	
		5. ペットを外に連れて歩かない	○	
		6. 遊歩道上での食べ歩きや野外での調理は行わない	○	
		7. ヒグマに出会わないようにする	△	ヒグマ出沒期ではないため
8. ヒグマに近づかない、刺激しない	△	ヒグマ出沒期ではないため		
9. 車のスピードは控えめに	○			
10. 漁業活動を妨げない	△	漁業活動期ではないため		
知床エコツーリズムガイドライン	エコツアーガイドに対するガイドライン	1. ガイドは、自然環境への負荷に配慮したツアー運営を行い、またツアー参加者及び一般利用者が自然環境に対して悪影響を及ぼさないよう指導する	○	
		2. ガイド活動により一般利用者の利用の妨げにならないよう配慮する	○	
		3. 地域の他のガイドと情報交換を行うために、知床ガイド協議会に加入する	-	事前に取り組む課題
		4. ガイドの技量を高めるために、各種ガイド技術講習会及び研修会に積極的に参加する	-	事前に取り組む課題
		5. 緊急時の安全確保のために、救命救急の講習を定期的に受講する	-	事前に取り組む課題
		6. 知床にはヒグマが高密度に生息しており、いづどこにおいても出会う可能性がある。ヒグマと遭遇した際に事故を避けるために、必要な技術と知識を身につける	-	事前に取り組む課題
		7. ガイドは地域社会について理解を深め貢献するためにも、知床(斜里・羅臼両町)に居住することが望ましい	-	事前に取り組む課題
		8. 知床での活動が1年目のガイドは、経験豊富なガイドに十分な指導・教育を受ける。	-	事前に取り組む課題
		9. ガイドは関連法令(自然公園法・鳥獣保護法等)を遵守し、ツアー参加者及び一般利用者にも遵守を指導する	○	
		10. ツアー参加者に対して知床が世界的に貴重な生態系を残す地域であることの説明を行い、正しい知識を提供する。	○	
		11. ツアー参加者に対して、自然環境への影響の軽減と保全への理解を深めるための説明を行う	○	
		12. ツアー参加者に対して、知床の地域文化・歴史などへの理解を深めるための説明を行う	○	
		13. ツアー参加者や一般利用者が野生動物に対しての餌付けやゴミの投げ捨てをしないように指導する。	○	
		14. ツアー参加者や一般利用者が遊歩道や登山道等へペットを持ち込まないよう指導する	○	
		15. ツアー参加者の体力や能力に配慮した行程でツアーを実施する	○	
		16. 大音量を発生させる拡声器等は使用しない	○	
フレベの滝でのガイドプログラム	1. 遊歩道に入る前に、ツアー参加者に対してヒグマとの遭遇を避けるために配慮する点や出沒時の対処法をレクチャーする	△	ヒグマ出沒期ではないため	
	2. ヒグマやハチなどの野生動物の誘引、軋轢を避けるため、ツアー参加者及び一般利用者に対して、飲食物を持ち込まないよう指導する	△	ハチ・ヒグマ出沒期ではないため	
	3. これ以上の遊歩道の拡張をもたらさないために、ツアー参加者及び一般利用者が遊歩道を外れて歩かないよう指導する	○		
	4. カイドー入が一度に案内する参加者の人数は概ね15人までとする	○		
	5. 遊歩道の幅いっぱいにはひろがり、他の利用者の通行の妨げになるような状態を避ける	○		
	6. 同時にツアーを実施する他のガイドと連携し、スムーズな遊歩道利用が行えるよう努力する	○		
	7. 動植物を採取しているツアー参加者及び一般利用者を発見した際は、止めるよう指導する	○		
	8. 展望台～フレベの滝上部の柵の外に一般利用者が出ている場合は、すぐ中に戻るよう指導する	○		

エコツアーガイドの現状とその課題  
～北海道・知床を事例に～

表3 ガイド時のルール遵守状況

心得・ガイドライン		項目	a氏	b氏	c氏	d氏	e氏
知床 ルール 「中央部 地区利用 の心得」	3つの柱	1. 自然環境への配慮	○	○	○	○	○
		2. ヒグマに対する注意	○	○	○	○	○
		3. 地域の生活・文化への配慮	○	○	○	○	○
	10の約束	1. 野生動物に食べ物を与えない	○	○	○	○	○
		2. 道を外れて歩かない	×	-	-	-	-
		3. 動植物をとらない、脅かさない、傷つけない、持ち込まない	○	○	○	○	○
		4. ゴミは持ち帰る	○	○	○	○	○
		5. ペットを外に連れて歩かない	○	○	○	○	○
		6. 遊歩道上での食べ歩きや野外での調理は行わない	○	○	○	○	○
		9. 車のスピードは控えめに	○	○	○	○	○
知床エコ ツアー ガイド プログラム	エコツ アーガイ ドに対す るガイド ライン	1. ガイドは、自然環境への負荷に配慮したツアー運営を行い、またツ アー参加者及び一般利用者が自然環境に対して悪影響を及ぼさないよ うに配慮する	○	○	○	○	○
		2. ガイド活動により一般利用者の利用の妨げにならないよう配慮する	○	○	○	○	○
		9. ガイドは関連法令(自然公園法・鳥獣保護法等)を遵守し、ツアー参 加者及び一般利用者にも遵守を指導する	○	○	○	○	○
		10. ツアー参加者に対して知床が世界的に貴重な生態系を残す地域で あることの説明を行い、正しい知識を提供する	×	○	○	△	△
		11. ツアー参加者に対して、自然環境への影響の軽減と保全への理解 を深めるための説明を行う	△	○	○	○	○
		12. ツアー参加者に対して、知床の地域文化・歴史などへの理解を深め るための説明を行う	○	○	○	○	○
		13. ツアー参加者や一般利用者が野生動物に対しての餌付けやゴミの 投げ捨てをしないように指導する	○	○	○	○	○
		14. ツアー参加者や一般利用者が遊歩道や登山道等へペットを持ち込 まないよう指導する	-	-	-	-	-
	フレベの 滝でのガ イドプロ グラム	15. ツアー参加者の体力や能力に配慮した行程でツアーを実施する	○	○	△	○	○
		16. 大音量を発生させる拡声器等は使用しない	○	○	○	○	○
		3. これ以上の遊歩道の拡張をもたらさないために、ツアー参加者及び 一般利用者が遊歩道を外れて歩かないよう指導する	△	-	-	-	-
		4. ガイド一人が一度に案内する参加者の人数は概ね 15 人までとする	○	○	○	○	○
		5. 遊歩道の幅いっぱいになり、他の利用者の通行の妨げになるよ うな状態を避ける	-	-	-	-	-
		6. 同時にツアーを実施する他のガイドと連携し、スムーズな遊歩道 利用が行えるよう努力する	○	○	○	○	○
		7. 動植物を採取しているツアー参加者及び一般利用者を発見した際 は、止めるよう指導する	-	-	-	-	-
		8. 展望台～フレベの滝上部の柵の外に一般利用者が出ている場合 は、すぐ中に戻るよう指導する	×	-	-	-	-

○:概ね遵守されている △:明確ではない一部遵守されていない ×:解説なし・遵守されていない - :ツアー内での該当なし

表4 ガイド内容

エコツアーガイド		a氏	b氏	c氏	d氏	e氏
所属事業所		A社	B社	C社	D社	E社
性別		男	男	女	男	女
年齢		30代	40代	20代	60代	30代
ガイド歴		10年	20年	2年	9年	12年
出身地		東京都	千葉県	東京都	東京都	福島県
同行したゲスト	人数	7名	5名	5名	2名	2名
	内訳	東京:20代カップル、20代前半女性1名、埼玉:40代夫婦と10代の子2名の家族	千葉:30代男性1名、東京:30代男性1名、40代男性1名、40代夫婦1組	東京:40代夫婦、大阪:70代夫婦、60代女性1名	東京:40代前半の夫婦	香港:30代の夫婦
ガイド内容	スノーシューの使い方	○	○	○	○	○
	森林生態系	○	○	○	○	○
	開拓	○	○	○	○	○
	猛禽類・渡り鳥	○	○	○	○	○
	鳥類(キツツキなど)	○	○	○	○	○
	エゾシカ	○	○	○	○	○
	流氷	○	○	○	○	○
	滝	○	○	○	○	○
	地形	○	○	○	○	○
	倒木	○	○	○	○	○
	ヒグマ	○	○	○	○	○
	小型哺乳動物(モモンガ、エゾリス、ネズミなど)	○	○	○	○	○
	トラスト運動	○	○	○	○	○
	世界自然遺産	○	○	○	○	○
森の味覚	○	○	○	○	○	
雪遊び	○	○	○	○	○	
サービス	飲み物	○	○	△(準備不足)	○	○
	写真撮影	○	○	○	○	○
	ガイドに要した時間	2時間40分	3時間	2時間15分	3時間30分	2時間30分
歩行距離		2.9km	3.1km	2km	3km	2.3km
半日ガイド料金		¥5,000	¥5,000	¥5,000	¥5,000	¥5,500

1. A社のa氏による「フレペの滝スノーシューウォーク」

エコツアーガイドa氏は、ガイド歴10年で30歳代の男性ガイドである。エコツアーの参加者は7名で、東京の20代カップル、1人参加の20代女性、埼玉県の40代夫婦と10代の子2名の家族連れであった。天候は曇り、出発時の気温はマイナス5度。冒頭にa氏は「今日は若い人が多いので、難しい話は抜きで楽しく」と言っていたように、知床連山が一望できる雪原ではジャンプをして写真を撮ることを促したり(図8)、雪をダイヤモンドダストのように見せる投げ方を伝授したりと、楽しさを前面にアピールする内容がツアー全体で多々見られた。ガイドとしての解説内容をみると、ツアー中にみられた鳥類やエゾシカ等の動物、地形、流氷等に関する説明はあったものの、ルールに示される、「知床が世界的に貴重な生態系を残す地域であることの説明を行」うことがなく、また「自然環境への影響の軽減と保全へ理解を深めるための説明」も十分とはいえず、世界自然遺産についての解説、斜里町が取り組むトラスト運動の説明もなされなかった。図3のガイドルートを見ると、①で歩行した位置は遊歩道を外れており、積雪により柵が

埋もれていたため（図9）一見どのような場所か分かりにくいですが、すぐ下は100mの断崖となっている箇所です。転落すれば命はない。また、②の位置に設置されている柵はヒグマの出没の危険があるため「ルール」では越えないこととなっているが、これを越え、崖伝いに進み、プユニ岬の見える景色の良いところまで進んでいる。そして原生林を通り、③の場所で遊歩道に合流していた。

ガイドに要した時間は2時間40分、歩行距離は2.9kmでガイド料金は5,000円であった。



図8 知床連山を背景に写真撮影をするa氏



図9 雪だまりの上を歩くa氏

## 2. B社のb氏による「原生林スノーシューツアー」

B社のエコツアーガイドb氏は40歳代、ガイド歴20年の男性ガイドである。ツアー参

加者は5名で、内3名は1人参加、いずれも関東地方からの来訪者であった。天候は曇り、ツアー開始時の気温はマイナス4.5度であった。

b氏は、ルールに示された内容については概ね遵守していた。ガイドとしての解説内容を見ると、解説すべき事項はほぼ網羅されていた。

「落語が好き」というb氏の説明は都市部で生活する人々にも分かりやすいよう、時事ネタをふんだんに用いながら



図10 木槌を使って解説するb氏

行われており、木槌など道具を用いながら(図10)五感に訴える解説を行っていた。歩行ルート(図4)は通称「男の涙」と呼ばれる滝を眺める断崖へと向かうルートで、基本的に原生林内を通っており、野鳥や小動物、樹木などについての解説がバランスよく組み立てられていた。

ガイドに要した時間は3時間、歩行距離は3.1kmでガイド料金は5,000円であった。

### 3. C社のc氏による「原生林スノーシュートレッキング」

C社のエコツアーガイドc氏はガイド歴2年の20代の女性ガイドである。ツアー参加者は5名で東京在住の40代夫婦と大阪に住む70代の両親と60代の母親という、家族でのツアーであった。天候は曇り、ツアー開始時の気温はマイナス7度。

ガイドはc氏であったが、同社のスタッフがマイクロバスを運転し、ゲストをスタート地点に送車した。車のスピードはほぼ法定速度だったものの、ゲストを下車させ、スノーシューを履くためのレクチャーを15分にわたって行った図5の①の場所は、片側一車線の北海道道93号知床公園線(以下道道)上であった。直線道路で冬季は通行量が少ないとはいえ、凍結した路上でのこうした行動は危険と感じた。しかし、ルールに示された内容のうち、知床ルールの10の約束の「車のスピードは控えめに」はクリアしている。

c氏の解説内容を見ると、原生林内では、図11のように体をつかって表現をする場面があったものの、参加者の体力を考慮してか、傾斜が緩やかで開けた箇所を歩行する区間が比較的長かったため(図5)、原生林内に滞在する時間が短く、キツツキなど鳥類の解説や倒木といった解説を行うチャンスが少



図11 体をつかって解説を行うc氏(右)

なかつた。その他の自然的な事象、歴史的な背景、生態学的内容については、妥当な解説がなされてはいたが、表面的な印象を受けた。「男の涙」のみえる景色のよい場所で休憩した際、お茶を用意していたが、カップを一つしか持参しておらず、ゲスト全員に配布できなかった。休憩の際、70代の女性が足の痛みを訴えたため、c氏が事務所に連絡をしたが、電話がつながらず、ツアーを切り上げ早めに戻ることとなった。ルール「ツアー参加者の体力や能力に配慮した行程でツアーを実施する」に照らし合わせると、安全管理の面で問題がある。ツアー終了近くになって電話がつながり、送車時と同じスタッフが運転してきたが、マイクロバス乗車までにスノーシューをはずし、道道を100mほど歩いた。そして、ゲストを乗車させた②の場所は見通しの悪い路上であった。

ガイドに要した時間は、冒頭の道道上でのレクチャー、および終了時の道道の歩行も含め2時間15分、歩行距離は2km、ガイド料金は5,000円であった。

#### 4. D社のd氏による「知床スノーハイキング」

D社のエコツアーガイドd氏はガイド歴9年の60代の男性ガイドである。ツアー参加者は2名で、知床へは複数回観光に訪れているという東京在住の40代夫婦である。天候は曇り時々雪、ツアー開始時の気温はマイナス7度。

d氏はルールに示された内容のうち、生態系についての明確な説明はなかったものの、概ね遵守されていた。ガイド内容を見ると、世界自然遺産についての解説はなかったが、これに深く関わるトラスト運動<sup>13)</sup>や自然に関する事象については、詳しく解説をしてい

た。歩行ルート(図6)は、「男の涙」へ向かうルートであり、b氏と類似したルートをたどっており、自然資源について詳しく解説が行われた。一つ事象に対する解説時間が4分以上かかる場合が多く、丁寧ではあったものの、気温の低い中では冗長な印象を受けた(図12)。



図12 解説をするd氏

ガイドに要した時間は3時間30分、歩行距離は3kmでガイド料金は5,000円であった。

## 5. E社のe氏による“Primeval Forests Snowshoe Hike”

E社のエコツアーガイドe氏は、ガイド歴12年の30代の女性ガイドである。ツアー参加者は香港から来訪した30代夫婦で、いずれも中国系であり、英語によるガイドであった。天候は雪、スタート時の気温はマイナス6.5度。

e氏はルールに示された内容のうち、生態系についての明確な説明はなかったものの、その他の項目については概ね遵守されていた。歩行ルート(図7)は「男の涙」へと向かっていたが、天候の悪化のため、b氏やd氏がとった景色のよい断崖上のルートをとらず、往復ほぼ同じルートをたどっていた。天候の悪化に鑑みると適切な判断と言える。ガイド内容については、森林に関する豊富な知識を分かりやすく解説し、伝わりづらい箇所については絵を使ったり(図13)、クイズ形式にしたりと工夫をしている様子がうかがえた。一方で、天候が悪く吹雪になりつつあったため、見えづらかった滝の解説がなかった。また、トラスト運動や世界自然遺産についての説明はなかった。休憩の際に、飲み物のサービスがあった。

ガイドに要した時間は2時間30分で、歩行距離は2.3km、ガイド料金は5,500円であった。





図13 図を示しながら解説するe氏

#### IV エコツアーガイドの現状と今後の課題

Ⅲ章での参与観察の結果から、以下の点が明らかとなった。

歩行ルートについて、「原生林をスノーシューでトレッキングする半日のプログラム」については、知床自然センター駐車場からスタートし「男の涙」が見える断崖まで歩くルートが基本ルートとして定着しているとみられる。ルート上には開拓の痕跡や大木、クマゲラやエゾモモンガの食痕、ヒグマの爪痕など、知床の自然を解説するためのネタが豊富にあり、ガイディングを行うには適していた。C社のc氏は参加者の年齢と体力に鑑みた結果、緩やかな傾斜をルートとして選定しているが、そのために解説事項が限定され、事前レクチャーやウォーキング終了後に道道に出ざるを得ない結果となってしまった。「フレペの滝スノーシューウォーク」では、夏季には歩くことのできないルートでフレペの滝まで向かい、冬ならではの景色を楽しむことが出来たが、ルールに定められた事項に抵触しそうな、判断がつきにくい場合がみられた。

顧客へのサービスについて、すべてのガイドが写真撮影をすすめる、自らカメラマンを買って出ている。特にA社のa氏は、雪の中ならではの写り方を示すなどしており、ゲストは楽しむ様子がうかがえた。飲み物をサービスしたツアーがあったが、これがあるか否かで、ゲストが持つ印象が変わることは、今回の参与観察では見受けられなかった。ガイディングについては、解説する対象について適切な言葉で適当な時間で、かつ分かりやすく解説することが求められる。ガイドとしての経験を積むとともに、自己満足に

陥ることなく、参加者の嗜好や年齢を加味しながらガイドを行えるスキルを身につけていく必要がある。ほぼ完ぺきなガイディングを行っていたb氏は「お客さま全員から75点貰いたいと思う。ガイドには正解なんてない」という。安全確保をしながら、よりよい自然資源の魅せ方、ポイントの取り方を考えていく必要がある。

環境教育、資源管理、安全管理を考える上で守るべきルールについては、各事業者ともに概ね遵守されていた。しかしながら、知床の場合は自然が厳しい地域であるため、一歩間違えば死に至る。ルール自体の問題点として、夏季を想定して作成されていると考えられるため、冬季のエコツアーには適合しない場合があることがあげられる。その結果として、いわゆる「グレーゾーン」が出来てしまう。例えば、ルールには「遊歩道を外れて歩かない」ことを示す。しかしながらこのルールは、踏み荒らしによる遊歩道の拡張をもたらさないためのものであり、積雪時にはその危険性がない。一方で、冬季はガイドツアーに参加しない一般利用者がガイドツアー中についたスノーシューの足跡をたどり、原生林の奥へと進んで道に迷ったり、崖の存在に気づかず転落したりする危険性がある<sup>14)</sup>。参与観察を行った個人を対象としたエコツアーの料金は、英語ガイドのe氏以外はすべて5,000円であり、一名でガイドツアーを運営することが、知床での「相場」であった。ゆえに、その中でいかにゲストを満足させるかがポイントとなる。知床でのエコツアーはそのほとんどが営利目的のエコツアーガイドによるものであるため、事業者としては「独自性がなければ継続的にゲストをとれない」と考え、他の事業者との差別化を模索するのは必然であろう。そして「他のエコツアーでは行けないところに行ける」「他のエコツアーでは見られないものが見られる」ツアーが実施されることがあるのだが、その代償として安全の確保がおざなりとなることは容易に想像できる。ルールが明確に述べていない「グレーゾーン」をコースに取り入れることにつながるのである。

一般のエコツアー実施時も安全確保は重要であるが、知床のように自然度が高いがゆえに危険も多いエリアでは、顧客の満足度とともに安全確保が最優先されるべきであることはいうまでもない。安全確保のためにはどこでどのような危険があるのか、地域で連携し情報を収集し、各事業者の情報をデータとして蓄積して、それをフィードバックさせ、ルールを改良し、洗練していく仕組みが必要である。また、情報を運用するガイドのスキルアップのための研修などが必要である。これらはガイド協議会<sup>15)</sup>が担うと考ええるが、残念ながらいまだそこには至っていないようだ。事業者ごとの努力とともに、組織的な連携をとることへの、今後の一層の努力が望まれよう。

## V おわりに

本稿では日本においてエコツーリズムの概念にもとづいたエコツアーが早い時期より行われている知床地域を事例に、エコツアーガイドの現状とその問題点について考察した。今回の調査はあくまで知床の事業者が行うエコツアーの一部であり、知床のエコツアーガイドすべてを物語るものではない。しかしながら、営利目的で行うエコツアーガイドの問題点の一端を洗い出すことができた。現在、知床では適正利用やエコツーリズムのあり方について、議論が重ねられている<sup>16)</sup>。今後の動向を注視していく必要がある。

今日の日本で実施されているエコツアーは、営利目的、非営利目的が並走しているが、玉石混交しており、今後そのシステムとともに洗練させていく必要がある。今後もエコツアーを実施している地域を対象に調査を継続的に行い、持続可能なエコツアーの実現のための方策について考察していきたい。

### <付記>

本稿作成にあたり、知床のガイド事業者の皆さまにはエコツアー参加、インタビューなどで大変お世話になりました。深くお礼申し上げます。

本稿の骨子は、2012年3月、日本地理学会春季学術大会（於首都大学東京）にて報告した。また、本研究は平成21年度駿河台大学特別研究助成費（研究代表者：天野宏司）の一部を使用した。

なお、本稿脱稿後、田中・加来・根津（2011）が発表された。参照いただきたい。

## 参考文献

- 海津ゆりえ（2008）：国立公園における新たな試み「エコツーリズム」、森林科学, No53, pp27-31
- 武正憲, 斎藤馨（2010）：南九十九島エコツアーにおけるガイド補助者の業務と環境認識に関する研究, ランドスケープ研究73（5）, pp489-492
- 武正憲（2011）：自然観光資源管理におけるエコツアーガイドの役割と能力, 環境情報科学論文集24, 327-332
- 田中俊次, 加来聡伸, 根津基和（2011）：知床（世界自然遺産）地域におけるエコツーリズムの現状と課題, 東京農業大学農学集報56(1), pp25-35
- 枚田邦宏（2001）：新たな経済的森林利用とその担い手：屋久島におけるエコツアー・ガイド活動を事例に, 林業経済研究 47(1), pp35-40

- 松本富美子, 田代正一, 大西緝(2004): 屋久島におけるエコツアーガイドの実態と課題, 鹿児島大学農学部学術報告 54, pp15-29
- 米津達哉, 原美登里(2010): 神奈川県西丹沢地域におけるエコツーリズム事業にみるエコツアー実施団体とエコツアーガイドに関する一考察, 地球環境研究 vol.12, pp161-171
- 田島康弘(2004): 屋久島のエコツーリズム～ガイド業者に対する調査から～, 鹿児島大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編 55, pp31-47
- 広瀬敏通(2006): エコツーリズム推進の要はエコツアーガイド, プロデューサーの育成(特集 観光人材育成—観光の未来のために) 観光文化 30(4), 10-16, 2006-07
- 敷田麻美, 森重昌之, 高木晴光, 宮本英樹(2008): 地域からのエコツーリズム, 学芸出版社, 205p

- 1) シマフクロウは北海道に120羽程度と推測されており, 知床半島は最大の生息域となっている。
- 2) オオワシはオホーツク海周辺に分布する海ワシ類でその数は5000羽程度といわれている。知床半島は最大の越冬地となっており, 毎年1000羽ほどがやってくる。
- 3) 学識経験者, 地域関係団体及び関係行政機関で構成された。
- 4) 2004年度に「知床国立公園利用適正化検討会議」に名称変更。
- 5) 現在は北海道地方環境事務所釧路自然環境事務所長。
- 6) 公益法人知床財団 HP の山中正実氏のコラムによる  
([http://www.shiretoko.or.jp/seeds\\_info/2011/10/post\\_6.html](http://www.shiretoko.or.jp/seeds_info/2011/10/post_6.html))。
- 7) 関係者によると, 秋季にシロザケ釣りをしていた釣り人の荷物が奪われた, 羅臼岳登山中に子連れのヒグマに遭遇し手に持っていたステッキで防御した, フレペの滝へ向かう遊歩道上で3～4m先の茂みにいたヒグマが立ち上がった, などニアミスは少なくない。
- 8) 知床オプションルーツアーズ SOT!の鈴木氏による。知床ガイド協議会に参加していない団体もあるため, 正確な数値は不明であるが, 知床エコツーリズム推進協議会の記載でも「50名以上のガイドが活動していると考えられる」との記載がなされている。  
([http://dc.shiretoko-whc.com/data/management/tekisei/eco\\_ActionPlan.pdf](http://dc.shiretoko-whc.com/data/management/tekisei/eco_ActionPlan.pdf))
- 9) 知床通年観光を目指し, 冬季観光の取り組みとして, 1987(昭和62)年より始まった。
- 10) B社は小規模なためC社と連携したガイドを行っており, B社で予約してもC社のガイドが担当する場合がある。
- 11) D社は2011年12月に独立分社化し, 株式会社として新たな体制で事業をスタートさせている。
- 12) 2011年4月からは活動拠点を帯広に移した。
- 13) 斜里町が1977年から取り組むトラスト運動「しれとこ100平方メートル運動」は, 開拓跡地の買い取りや植樹費用等にあてる金額8,000円を一口として, 「しれとこで夢を買いませんか」の

エコツアーガイドの現状とその課題  
～北海道・知床を事例に～

キャッチフレーズで寄付を募った活動である。全国の人々から賛同を得て、また運動を支援する報道にも後押しされ、各地から寄附金が寄せられた。1997年からは新たな活動「100平方メートル運動の森・トラスト」として展開されている。

- 14) 実際に踏み跡をたどって遊歩道を外れた一般観光客が遭難した事件が発生している。
- 15) 知床ガイド協議会設立趣意書には「私たちには、これまで以上に、ガイド技術や安全管理能力の向上をはかることが求められています。それに伴い、ガイド自らによる組織的な連携と情報交換が不可欠となっています。また、利用者に知床の魅力を感じてもらうためには、ホスピタリティー精神に基づいたガイド活動が必要となります。さらに、豊かな自然環境に支えられている漁業、農業、観光などと連携し、知床の魅力をアピールすることは、地域社会への貢献であり、ここ知床で暮らす一員としての大きな使命といえます。」と述べている。
- 16) 2012年2月21日、札幌市で開かれた「適正利用・エコツーリズム検討会議」ワーキンググループでは、「地域主導を推進するため、検討会議に対して、誰でも新たな観光利用の方法やルールの提案ができること」を戦略に盛り込むことなどが報告された。